

審査員長講評 辻 司

61 回目の新しい一步を踏み出した市展です。当展を足がかりにプロの道で活躍してくれている人たちも多くおられ同慶のいたりです。その一方で確実に世代交代の渦中に晒されています。社会の動静を覗く鏡として市展の果たす役割が大であります。待望の市民ギャラリーも実現されます。

搬入の利便性を高めるべく新しい試行も始まり、我々審査に携わる者も真摯に本展の充実と発展に寄与してゆく所存であります。

今回も 561 点もの熱い出品があり、294 点が入選し、96 点が入賞 内 5 部門 5 点の市展賞が選ばれました。

出品増著しい写真部門にあつて、市展賞の作品は工事用ネットを通して捉えられた夜店の光景、絵画的な雰囲気や暖かい色調と共に心のぬくもりを感じました。この部門はいち早く社会の表情が見て取れるので毎回楽しく見せて頂いています。

工芸部門の市展賞「風韻」は、青磁の清らかさと凜としたたずまいで存在感があります。多くの分野でそれぞれの素材を駆使して表現され、精進が窺えます。

書部門では、力量伯仲、突出した豪放磊落な気配の作品に出会えなかったのは残念。

デザイン部門の明るさと楽しさが素晴らしい。特に熟年層の若気と元気が頼もしい。

彫刻・立体造形部門の市展賞「どれも冬の記憶」は心の内面に踏み込んでくる作品で印象的、出品作の多様な材料の表現に注目しました。

日本画部門の「夏日」あの夏の日の癒やし色、凌霄花(のうぜんかずら)の花風情がよく捉えられています。優雅さとしっとり感に各人の思想の結実が期待されます。

洋画具象部門の市展賞「ペア♥」は独自のファンタジーを展開し、ゆるぎない表現が出来る力を蓄えてくれました。大いなる成長に乾杯！又、美術協会会員に推された大門清禾さんの描写力と構成力、磨きがかかり着実に力をつけてくれました。二人共当展育ちです。全体傾向として新旧交代期に入り、少々厳選になりました。

洋画抽象部門は出品者が増加して表現の多様性が顕著ですが、鮮烈な強い作品に出会えなかったのが残念。ここも過渡期かもしれません。

先行きの見えづらい現代、しかしながら私たちは前に進むしかありません。あくなき挑戦をして行きましょう。

洋画部門

田川 絵理

■入賞作品についての講評■

【具象】

【市展賞】 いかわあつきさん 「ペア♥」

楽しい空想の世界を暖かく捉えしっかりした絵肌で大作にまとめ上げる力量がついて今回の受賞になった。

【優秀賞】 小山雅士さん 「朽ち行くものよ」

朽ちてゆく物質ごとの質感を丁寧に描写、抑圧的な時代の空気が伝わってくるようだ。

【優秀賞】 渡部和枝さん 「TSUNAGU」

海底は作者にとって親しく、馴染みの意識の底にちがいない。そこに関連しあういのちのかたち。

【鉄斎美術館賞】 松田真理子さん 「MY SON」

自転車・愛犬と組み合わせたパレットを持つ若々しい青年が子息である、その誇らしさが絵の充実となっている。

【奨励賞】 長谷川博子さん 「ラビリンス」

迷宮の都市の住人として深く分け入る楽しみと潤いを見つけた。

【奨励賞】 日高洋一さん 「集中」

手元に集中する男達、抑えた色調の描写に暗く押しつけた熱気が感じられる。

【抽象】

【優秀賞】 川島紘一さん 「気 2018」

すっきりしたベテランのしごと。

【優秀賞】 高萩典子さん 「最果」

溢れる情報はさいはての地に流れ着き、意味をなさない順列が無秩序に凍てつく。

【奨励賞】 島山忠美さん 「チゴイナーワイゼン 1」

ユニークな美しいしごとが目を惹いた。

■全体的な総評■

今回はやや小ぶりなサイズの応募が増えているように感じられました。予め出品申込が必要となり、制作の勝手が違った方があったのではないかと思います。また、時代の抑圧的な空気を反映してか暗い色調や濁った発色のものが多いという点が審査前の第一印象でした。

その中で入賞することになった作品群は、ひとつ発想の独自性、また技術の確かさ、あるいはしっかりした美意識、生き活きとした作画姿勢、等々それぞれの観点で何かひとつ他に抜きん出て輝きを見せたのではないのでしょうか。さまざまな価値基準の美点を同時にすべて兼ね備えることは困難ですが、一人ひとりが関心ある足下を耕す探求のなかに、他を振り向かせる魅力というエネルギーがこもる、と改めて気付かされたことでした。

絵に打ち込むみなさんの意欲が、自身を客観視できる涼しい目を伴いながらも熱く暖かくあふれ出て、さらなる開花を見せて頂けますよう期待してやみません。

最後に、出品の際は、具象と抽象の応募区分に十分注意していただけたらと思います。

彫刻・立体造形部門

辻 弘

■入賞作品についての講評■

【市展賞】 門脇済美さん 「どれも冬の記憶」

焼け跡から掘り出された物体から過去の記憶を想い出させる厳しい現実を深く追求した作品となった秀作である。

【優秀賞】 水野千秋さん 「ゆらぐ 2018」

チタン材を焼き付けた美しい色合いが、細い鉄線に付いてゆらぐ楽しい表現の中に現実のはかなさを感じる作品。

【鉄斎美術館賞】 馬場隆さん 「“あっと！ホーム”」

北欧を想い出させる急斜面の屋根と赤瓦。白い樹木と街の風景の中に家庭の温かさを感じさせる。

【奨励賞】 上野山継二さん 「ポイント」

測量の基点と斜線といった冷たい知性が作品のコンセプトとなっている。

【佳作】 小河原國弘さん 「帰して！森の子供」

自然破壊をチンパンジーの子供に託して厳しく表現している。

■全体的な総評■

昨年からの彫刻・立体造形部門と変更して、本年度も出品作品が増加したことは喜ばしいことである。ところで、立体造形の概念が広く理解されているが、作品としての造形には思想なり、コンセプトが必要である。幸い今年度の受賞作品は明確な思考がうかがえるが、単に手仕事、趣味的な作品もあり、残念ながら選外とせざるを得なかった。

作品の内なるイメージと表現のための材料技法が相まった作品を期待している。

写真部門

吉川直哉

■入賞作品についての講評■

審査の結果、満場一致で作品「夜店」が市展賞になりました。祭りの夜店で、ひとときを楽しむ子どもたちの姿を、網目状のネットを通して撮影したものです。一見、モザイク画のようにも見え、ユニークな映像になっています。さらに、夜店に吊るされた電球のオレンジ色が情緒をかもし出しています。

優秀賞の一つ目は、作品「ソレ、イケー！」。飾馬奉納のシーンでしょうか、水しぶきを跳ね上げながら子どもたちが元気に走り抜けて行く瞬間をうまくとらえ、逆光であることも画面を引き立たせています。優秀賞二つ目は、作品「行き交う人々」。連続のパノラマのように構成された三点組ですが、一点ずつ、それぞれがきちんと画面構成が考えられているのがわかります。この作品も逆光気味ですが、人物がつぶれないで表情を残していて、モノトーンながら単調になっていません。三つ目の優秀賞は、作品「山湖の星空」です。カメラとレンズの力を最大限に駆使し、自然の雄大さ、美しさを描いた作品で、カラーの風景写真のなかでは群を抜いていました。最後の優秀賞は、作品「朝霧橋」です。湯気が霧でしょうが、橋を歩く人々を包み込んでいるファンタジックな写真です。よく見ると、二組の親子連れが写っていて、その一組が子どもと一緒に記念写真を撮っていて、ユーモラスなポーズをとっていることも写真に魅力を与えています。

鉄斎美術館賞には、カラー作品「網目ホウズキ」が選ばれました。酸漿を水にしばらく浸けておくと、網目状の酸漿になりますが、それをシンプルな画面構成にまとめ、まるで日本画のような作品にしています。さらに、背景を黒く落としていることで、編目の繊細と赤い実が映えています。

奨励賞は、まず「小さな宇宙」。ガラスの向こうに、ぼんやりと見えるあどけない少年の顔と、ガラスに付着した水滴が生むレンズ効果によって、文字通り小さな宇宙が生まれたユニークな写真になっています。奨励賞、「私そして妹」は、何よりも柔らかな逆光がきれいなモノクロ作品です。「私」の視線と表情をメインにして、素直に第一人称で語っているところも良いと思いました。同じ奨励賞の「やんちゃ盛り」は、子どもたちが遊具で遊ぶシーンを撮ったものですが、浴衣姿の少女が、そのタイトルをよく表しています。青空と黄色い遊具のコントラストも幸いしています。奨励賞「大物 ゲット」は、獲物をとらえた一瞬を写し出したもので、写真でしか表現できないシーンを見事にゲットした力強い作品です。

■全体的な総評■

応募点数は前回よりも増えました。また、テーマや被写体がバラエティに飛んでいることは大変喜ばしいことです。また、技術的な発展もみられます。その一方で、フレームやマットの使い方にも注意を払ってほしいと思う作品が少しありました。既成の市販品をそのまま使うのではなく、ご自身の作品に合わせてほしいと思います。それから、毎回感じる事ですが、もっと組写真の研究をしてほしいと思います。単写真では弱いものを集めて組もうとするような安易な組み方が、作品全体を弱めてしまっているのではないかと、思うものがありました。組写真は、同じ種類の写真を集めただけでは、組作品にはなりません。物語を編む作業をよく考えてほしいと思います。

最後に、もうひとつ。これも前回も苦言を呈しましたが、作品の題名も大切に付けてほしいと思います。作品はいいのに、タイトルを読んで、落胆することもありました。素敵な作品が撮れたら、プリント、マット、額、タイトルなど、最後まで気を抜かず、最高の仕上がりにしてください。入選されなかった方は、これに懲りず、ぜひ来年もチャレンジをお待ちしています。

デザイン部門

相澤孝司

■入賞作品についての講評■

昨年と同様に審査の結果から第61回の市展賞は、該当者なしと判断し、優秀賞を3点選考した。

優秀賞の内田勝美さん「Fire Bird」は、火の鳥をダイナミックに独自の切り絵で表現し、完成度も高い作品である。

優秀賞の池上眞さん「“兵庫の祭り”ーカミダノミー」は、地元兵庫県の祭りを切り絵で表現したプロレベル？と感じる作品である。

優秀賞の早川博唯さん「ストラビンスキー／「ペトルーシュカ」から第1場・第3場・第4場」は、バレエの場面を独自の世界観で表現した組み作品のイラストレーションとして高く評価した。

鉄斎美術館賞の福岡なおこさん「ねこのパン屋」は、ほのぼのとした情景が伝わるイラスト作品で好感度が高い。

奨励賞を2点選考し、それぞれ受賞にふさわしいレベルとして評価しているが、1点については次回の出品部門をよく検討するべきだと思われた。佳作2点は、優秀賞の作品を参考にして次回も頑張してほしい。

■全体的な総評■

近年の傾向になるのか残念ながら市展賞に該当する作品がなかった。優秀賞の3点は、過去の本展での受賞の経験があり大変素晴らしい作品である。鉄斎美術館賞及び奨励賞の作品も完成度が高く、受賞作品は全体的にレベルアップしている。しかし、市展賞を受賞するレベルには、もっと独創性が感じられること、デザインに関する社会性・時代性なども考慮した作品を期待する。

昨年に比べて出品点数が29点に増加し、審査員としてよい傾向だと思ったが、彫刻・絵画・工芸などの部門との領域があいまいな作品、稚拙な表現の作品などがあり、多数を選外とした。いつも総評で述べているが、イラストレーションなどの平面の作品が入賞および入選の多数をしめ、立体作品は数点であった。デザイン部門では、様々な切り口が作品のコンセプトになる。次回に向けて、さらなる出品点数の増加と挑戦的な作品を期待する。

書部門

山下啓明

■入賞作品についての講評■

- [優秀賞] 宇都葉峰さん「曹丕子桓」
筆力、間の取り方、リズムの変化あり秀作。
- [優秀賞] 鈴木睦水さん「杜審言」
穏やかな作品です。
- [優秀賞] 中村瑞花さん「虚子の歌」
前半のリズムよく、渴筆に変化あれば、更によくなります。
- [優秀賞] ・口浩子さん「さ夜ふけて」
作品構成が良く、凛とした線で大きな、うねりあり秀作。
- [鉄斎美術館賞] 上原香雲さん「桜」
行間の変化面白く、余白を生かしているが、ポイントがあればよくなる。

■全体的な総評■

今年は、特に生氣溢れる作品が少なく、市展賞に推薦する作品がありませんでした。とても残念なことです。半切の規格の中での表現には無理もありますが、来年は、各分野に期待いたします。

工芸部門

秋山文子 / 香川弘一

■入賞作品についての講評■

- [市展賞] 井上路久さん「風韻」
過去2回優秀賞を受賞されています。年々、作品の質、表現・技術が向上されている様に思います。工芸部門、5年ぶりの市展賞おめでとうございます。
- [優秀賞] 野入しをりさん「バカンス(モザイクタイル画)」
柔らかなパステル調でさりげない自然な美しさを切り取って見せる作品。モザイクタイルで表現し、独特のムードをかもしだし、技とセンス、色彩感覚も優れ、癒やされる作品です。
- [鉄斎美術館賞] 小林純子さん「東雲春光」
部分部分が考え抜かれた末に全体が形作られ、作者の想いや、愛情がしみじみと、心に語りかけてくれる。細分まで丹念に綺麗に仕上げであり、人の心を動かす人形美に優れた作品です。
- [奨励賞] 嶋本博文さん「線条紋鉢」
昨年に引き続き、丁寧で完成度の高い作品ですが、昨年にくらべ少し迫力不足の感があります。

■全体的な総評■

工芸は陶芸をはじめ、染、ガラス、木工、人形、織物、モザイクタイルと多種多様、どの作品も真摯に制作にのぞまれたことが、一目で分かる作品が数多く見られました。入賞を逸した中にも秀作が見られました。個性あふれる作品が出てくることを来年も期待しています。

日本画部門

潮見 冲天

■入賞作品についての講評■

[市展賞] 鷺見佐枝さん「夏日」は、昨年のモチーフから一変、凌霄花(のうぜんかずら)に癒やしの黄色を配した気韻生動の漂う逸品。

[優秀賞] 相澤喜美子さん「カラー」はバックの箔から感じられる彷彿とした魅力と共に、それぞれのカラーのうねりが良い。実力者の域にある。

[鉄斎美術館賞] 甲元美代子さん「神秘なる道」は森閑とした木立のなかで空気感がうかがわれ、詩情に富んでいる。

[奨励賞] この度奨励賞は5点となりました。

先づ、鶴正幸さん「唐紅」は神秘的魅力。丹羽善二さん「黎明(シナイ山)」、知りつくした山の表現が断トツ。

森川絹子さん「春の夢」、ヤマボウシを中心にアレンジしたのが好感。

森本悦子さん「ひととき」、お国柄が出て、人の営みが良い。

八木利郎さん「重陽」、斬新な発想と日射しの処理がいい。水墨の妙あり、今後楽しみ。

[佳作] 亀村紀美子さん「水鏡」、清らかな空気がただよっていて品格がある。

佐藤福男さん「春光」、しっかり描いていますが部分的に色を少し落としてみてはいかがでしょうか。

土井美智子さん「寂秋」、表現に一生懸命さが伝わってきます。

残念ながら受賞されなかった山下翼子さん「雨あがり」、今後少し大きめの作品にチャレンジしてみてください。内容はすばらしいものがありますので、そのまま描き続けてほしいところです。

その次、山田治則さん「正月の正装」ですが人物の顔のバランスに注意してください。

又、芦田きみゑさんの「木の根径」や山草さんの「清流」など優秀でしたが小作品のため、残念な結果となりました。次回再チャレンジでお待ち申し上げます。

■全体的な総評■

近年の日本画部門では、純日本画、油彩風、墨彩画、水墨画等、多様化してきており、その表現も多岐に亘っておりますが審査にあたりましては、伝統にのっとり「絵画」としての基本を見据えて、評価を考えております。

見方、考え方、色々ある中であやまちのない評価を心がけて参ります。出品者の方々が楽しんで、心を込めて描く事で次のステップアップにつながります。今後とも精進していただきますようお願いしております。